

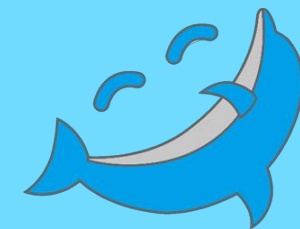


社会福祉法人 一粒

学 齡 期 発 達 支 援 事 業

ドルフィンキッズ・プラス

2019.3.3 杉並区発達障害児地域支援講座 実践報告会(東京女子大学)





ドルフィンキッズ(-プラス)の利用児

平成31年2月10日現在

登録者数:202名

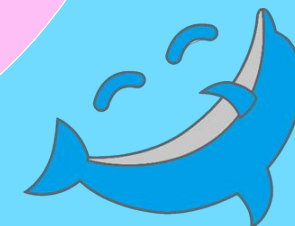
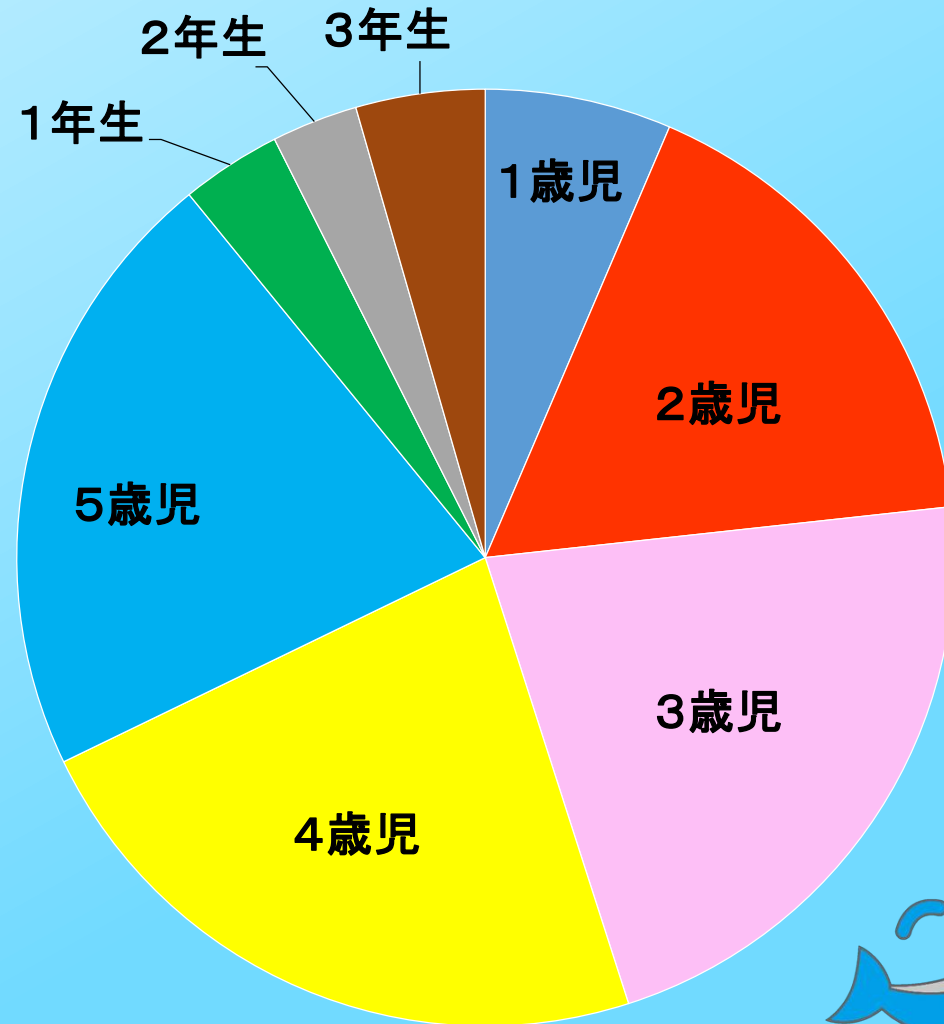
1歳児:13名 2歳児:34名

3歳児:44名 4歳児:46名

5歳児:43名 1年生: 7名

2年生: 6名 3年生: 9名

*小学生 学齡期発達支援事業 :16名
放課後等デイサービス : 6名





ドルフィンキッズ・プラスの基本姿勢

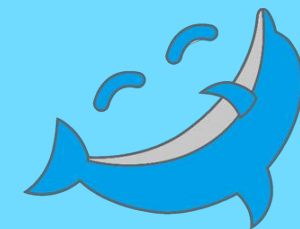
利用児・家族のニーズに応じた支援

ドルフィンキッズ・プラスの特色

個別・小集団によるコミュニケーション支援・SST

保護者相談

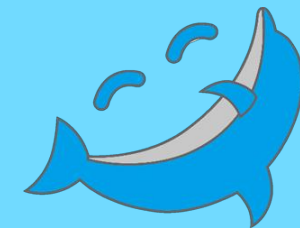
学校連携

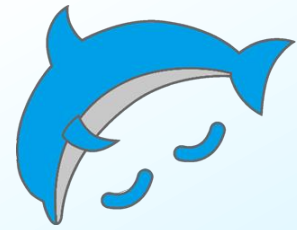




モデルケース

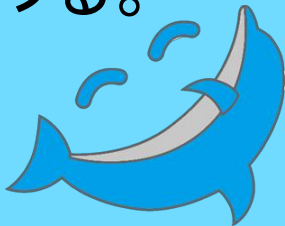
- 1年生3学期より利用開始。注意欠如多動症。幼児期は療育経験なし。
- 学校での様子：友だちとのトラブルが多い。
友だちと関わりたいが関わり方が未熟なため、大声を出したり、乱暴な行動に出てしまうことがある。色々なものに興味があり、表現力は長けている。
- 家庭での様子：何度言っても従えず、注意することが多い。気分の切り替えが難しい。
- 家族の願い：あまり注意を受けないで暮らせるように、周りの人のことを考え、友だちとの関係が円滑に行えるようにコミュニケーションスキルを高めたい。
- WISC-IV 言語理解120前後
知覚推理・ワーキングメモリー・処理速度90前後

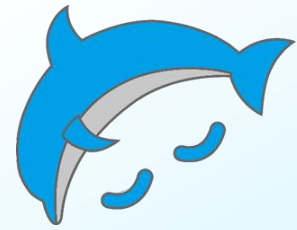




月2回利用(個別45分+同学年児とのペア45分)

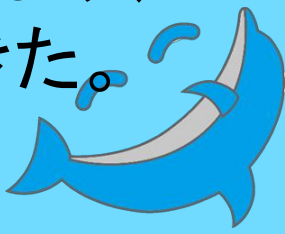
- ・個別での様子: リラックス。興味のあることを熱心に話して伝える。
興味がないとイスを揺らしたり、「暇だあ」と言って集中せず。
ゲームなどでは自分が有利になるよう操作。担当が気持ちを表明すると修正することもあるが、「ちょっと待って」と自分のやり方を押し通そうとすることが多い。
- ・ペアでの様子: 楽しいが緊張感あり。ペアのちょっとした一言にカッとなる。
「うるさい！」と大声を出したり、威嚇。ペアより優位に立とうとするが、自分の思い通りにならないと楽しく遊べなくなる。
陰悪なまま終了しても、次回には気にする様子なく関わる。





工夫・改善した点

- 個別→ペアでは、お互い楽しさからの興奮がトラブルに発展することが多く、帰り際の時間の取り扱いが課題だった。
 - ⇒90分の使い方を、個別→ペア→個別にして、クールダウンと振り返りの時間を設定した。
 - ⇒相手の気持ちや自分の言動を客観視するきっかけになりつつある。
- ペアでのトラブル時、担当が本児の気持ちに寄り添いながらも、全体を収めるための指示も出さねばならず、関わり方に悩むことがあった。
 - ⇒ペアを仕切るスタッフを新たに配置し、各々の担当は児に寄り添える体制を整えた。
 - ⇒トラブル時に本児の心の動きに集中できるため、児との関係が深まり、**本児の特徴を、関わりの中からの実感として持てるようになってきた。**





学齡期発達支援事業をやっていて感じる難しさ①

利用開始前の状況によるニーズの多様性

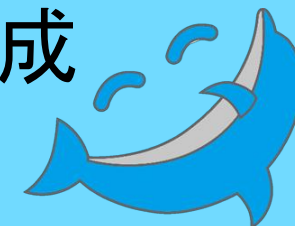
学齡期発達支援事業利用児16名中

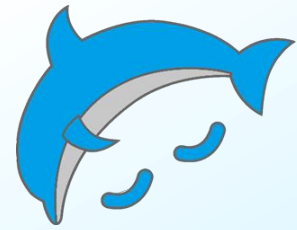
- ドルフィンキッズからの継続利用: 9名
- 他事業所で児童発達支援利用: 2名
- 学齡期発達支援事業での新規利用: 5名

気分の切り替え、執着
ASD? 二次障がい?

利用児: 二次障がいの兆し

保護者: 子ども理解、療育に対するイメージ、信頼関係形成





学齡期発達支援事業をやっていて感じる難しさ②

成長過程・学年進行によるニーズの変化

たとえば・・・

就学前・入学直後のニーズ

- 環境変化への適応
- 言語・コミュニケーション
- 情緒・行動コントロール

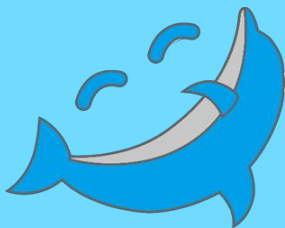


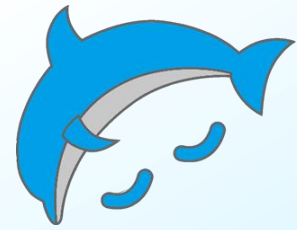
2年生・3年生のニーズ

- クラス内での人間関係
- 学習(遅れ、意欲、態度、宿題)
- 自己理解・前思春期

根っこは同じかもしれないが、顕在化する課題に変化

年齢が上がるにつれて、より内面へのアプローチが
求められている印象



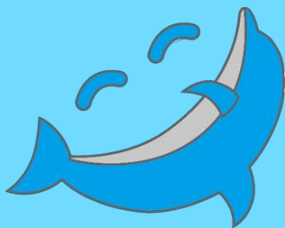


学齢期発達支援事業をやっていて感じる難しさ③

始まったばかりの学校連携

- 学校への広報活動がまだまだ
 - 担任の先生が忙しく、見学と面談の日程調整が大変
 - 特別支援教室との連携、役割分担について考える
 - 学校によって違う特別支援、合理的配慮に対する取組み、捉え方
- ・
・
・

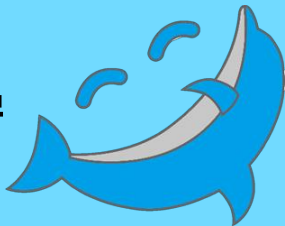
今はもっともっと実績を積み重ねて、
いろいろな課題を見つけていく時期





その他、学齢期発達支援事業をやってみて感じていること

- 課題やニーズは個人と環境との相互作用によって生じる
 - ⇒つまづきの時期、支援が必要になる時期は人それぞれ
 - ⇒1～3年生もいいが、小学6年間の中で必要な3年間という枠組みもいいのでは
 - * 児童発達支援においては、支援者・家族の双方にとってのお守りになる
- 学習ニーズのウェイトが高まったケースへの対応が難しい
 - ⇒限局性学習症の子には事業所変更が有効
 - 自事業所で抱え込まず、他事業所の特性を活かして区全体でサポート
 - ⇒一方で、支援学級とのグレーゾーンの子の事業所変更には複雑な気持ち察して余りある家族の気持ち、無邪気さの中に垣間見せる本人のつらさ
- 児童発達支援中心のため、受け入れ枠がかなり限定されていることへのジレンマ
- この難しさ、悩みは自分たちの事業所だけが抱えているのでは？という不安





ご清聴ありがとうございました

ドルフィンキッズ・プラス 一同

